

# 有機農業事例集



令和7年3月

菊池市環境保全型農業推進協議会



# 目次

はじめに	5P
------	----

---

## 菊池市内の生産者の取組事例

---

株式会社 有機農場（水稲、麦）	6P
菊永 光作さん（水稲）	8P
株式会社 ろのわ（水稲、麦、大豆、雑穀）	10P
富田 和孝さん（水稲、麦、大豆）	12P
實取耕房（水稲、ゴボウ、WCS）	14P
斉藤製茶園（茶）	16P

## 熊本県内の生産者の取組事例

---

株式会社 山都竹琉	18P
株式会社 あさぎり商社	18P

## 県外の自治体の取組事例

---

千葉県 いすみ市	19P
茨城県 石岡市	20P
宮崎県 綾町	21P



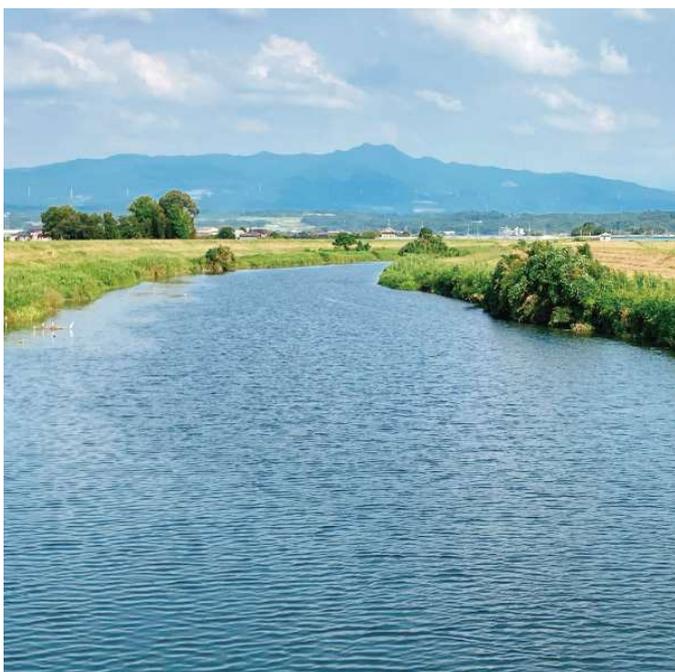
# はじめに

菊池市は、豊かな自然環境と長い農業の歴史を背景に、有機農業が盛んな地域であり、平成26年より独自の栽培基準「環境王国菊池農業生産基準」を定め、環境にやさしく安心・安全な農産物を提供しています。

令和3年5月には、国が【みどりの食料システム戦略】を策定し、「2050年までに耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%（100万ヘクタール）に拡大」「化学農薬使用量（リスク換算）を50%低減」などの目標を掲げています。

本書『有機農業事例集』は、新規就農者や有機農業への転換を検討している生産者の方々に向けて、有機農業の先進的な取組や成功事例を通じて有機農業の魅力と可能性を知っていただくために作成しました。

これから有機農業に取り組む際の一助として、多くの方にご活用いただければと思います。



## 生産者コメント

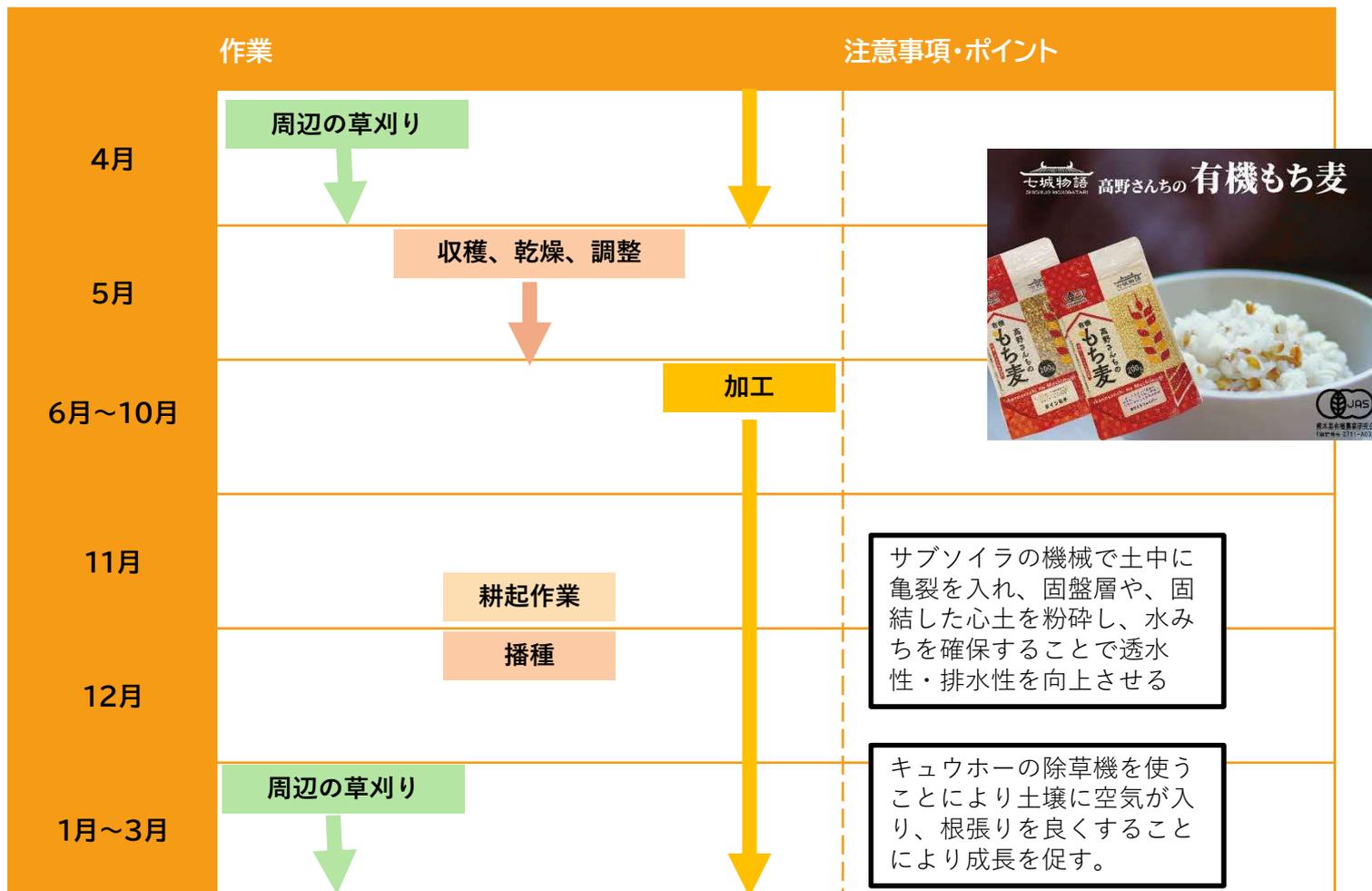
50年前、祖父から始まった自然農法を受け継ぎ、脱サラして就農しました。自分の商品を世に知ってもらうためには、全国のお店に並べてもらうことが一番だと思い、色んなところへ営業をかけることから始めました。最初は1.2haだった作付面積は現在29haまで規模拡大し、取引先は5店舗から全国の130店舗での取り扱いとなり、今も増え続けています。

有機JAS認証を2001年9月に取得し、無肥料、無農薬へこだわり、土は微生物に育ててもらうことが基本と考え、土壌中の微生物が住みやすい環境づくりを行いながら生産しています。自然農法は肥料がない分、どのようにすれば収量を増やせるのかを試行錯誤していく実験です。経験に勝るものはありません。様々な生産方法がある中で、自分なりの信念を決めて農業に取り組むことが大切だと考えています。



代表取締役 高野 三喜夫さん

## 麦（大麦、はだか麦、小麦） 年間スケジュール



## 水稲作りのポイント

### 土づくりについて

動物性肥料を使用せず土づくりを行っています。微生物の餌となる炭素分が必要なため、稲わらや麦わらなどの植物残渣を土壌へ戻しています。

レーザーレベラーを使用し、土壌を均平化しています。これによって窒素が多いところに飛来してくるウンカや、ジャンボタニシの対策にもなり、食味の均一化にもつながります。

### 除草について

基本的に田んぼ内の除草は水管理で行っており、特に草が生える場所があれば深水管理で除草を行っています。(株みのるの除草機では、条間を除草することで、除草だけでなく、土壌中に空気を入れることができます。

## 水稲 年間スケジュール

	作業	水管理	注意事項・ポイント
4月	草刈り		
5月	苗床準備 播種		ナノバブルを利用し、水中に空気をとどまらせ根張りを良くすることにより、成長を促す。
6月	耕起作業、代掻き 田植え		
7月		間断かん水	間断かん水を行うことで、土壌中の好気性菌が活性化し、根張りが良くなる。
8月			中干しは根が切れない程度に行う
9月	収穫、乾燥、調整		なるべく高温での乾燥を避ける。
10月			
11月～3月			



## 生産者コメント

特別栽培米をこれまで生産してきましたが、美味しさを追及する中で、有機農業100%の生産にたどり着きました。加恵地区は米がおいしいと言われてきました。どこのお米がおいしいのかを食べ比べ始め、食味コンクールを開催するようになり、当初は味のばらつきがありましたが、最近は優勝する人が毎年違う人だったりするようになりました。地区のみんなで努力して、どこのお米を食べてもおいしい地域になったと思います。8年前から毎年、熊本市内の保育園から田植え体験、稲刈り体験を受け入れています。子供たちと触れ合いながら、お米作りについて知ってもらえる機会を提供できることを楽しみにしています。その中から将来米作りをしてみたいという子が出てきてくれたらいいなという思いで食育に携わっています。これからも、消費者の方にとって安全安心でおいしいお米を作っていきます。



菊永 光作さん

## 水稲作りのポイント

### 土づくりについて

地力促進剤：レンゲ

使用している肥料：サミットミネラル、グアノ、おさかなペレット

追肥：パワフルマグ、サミットミネラル

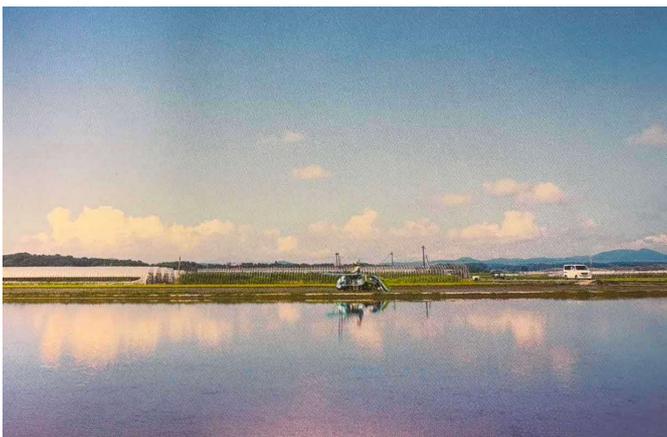
圃場ごとに使用する肥料を分け、食味の追及を行ってきました。

### 除草について

畔の草刈りを月1回行う。（刈払い機、ウイングモア、スパイダーモア）

水管理：浅水にする時の代掻きを丁寧に行う。凹凸ができると雑草生えやすくなるため、均一になる努力をしています。

田んぼの除草はジャンボタニシに任せている。その分水管理には気を配っていて、共存できるようにしています。



水稲 年間スケジュール

	作業	水管理	注意事項・ポイント
4月			
5月	レンゲすきこみ 草刈り	苗床準備 播種	耕運前にフレールモアでレンゲを細かく粉碎し、分解しやすくする。
6月	肥料散布 トラクター耕運 代掻き	田植え	凹凸ができると雑草が生えやすくなるため、浅水にする時の代掻きを丁寧に行う。
7月		浅水	
8月	追肥	中干し(1~3日) 間断かん水	畔の草刈りを月1回行う。
9月		落水	
10月		稲刈り 乾燥 もみすり	
11月	トラクター耕運 レンゲ播種		 <p>レンゲ畑の様子</p>
12月			
1月			
2月			
3月			

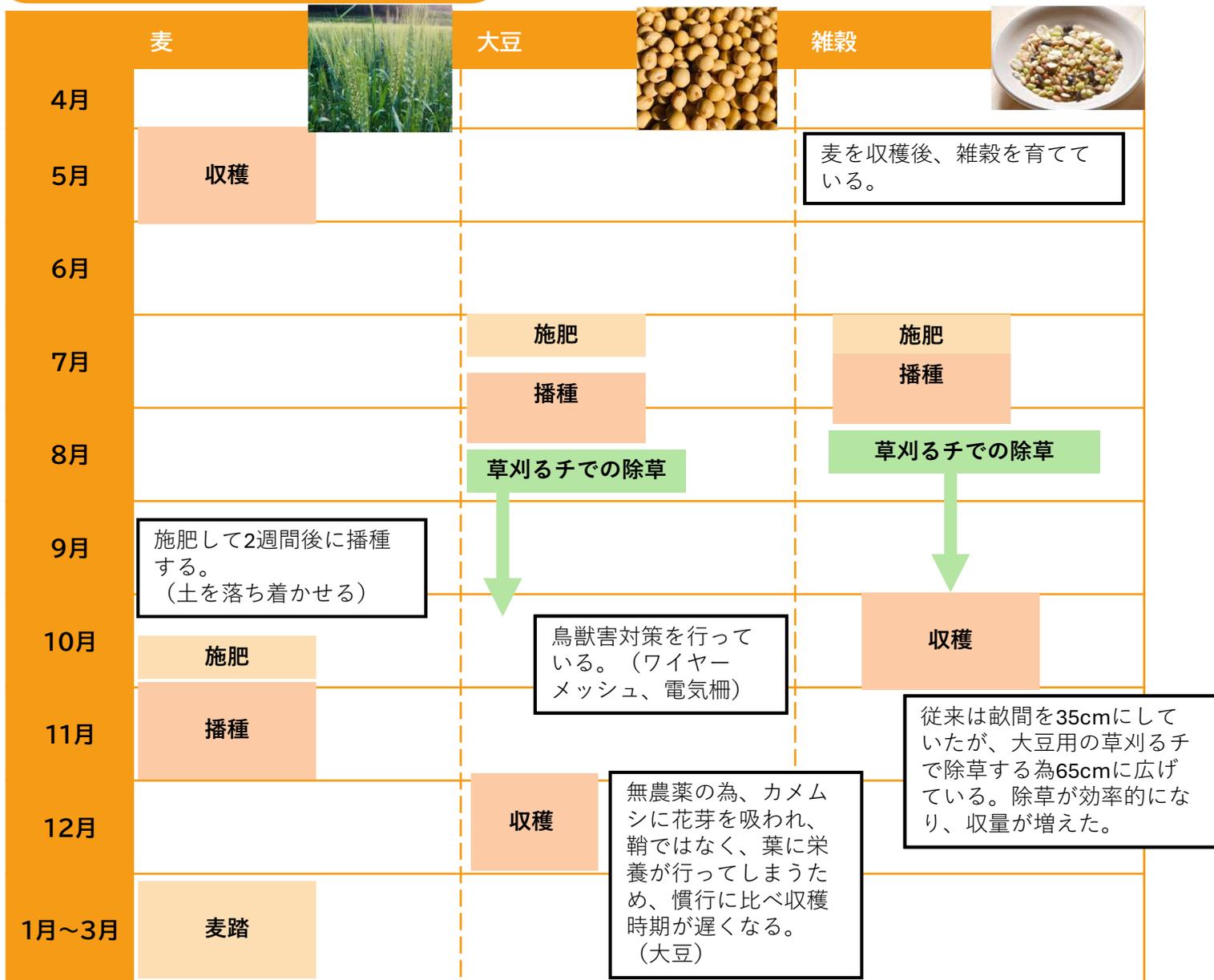
## 生産者コメント

当社では、農薬・化学肥料を使わない有機栽培を受け継ぎ、25年以上続けております。生産から加工、パッキング、販売まですべて自社で行っています。農産物の生産が「工業化」してしまっている状況も見受けられる中、私は生産者と消費者の間のつながりが大事であると考え、取引を始める際には一度菊池に来ていただき、圃場を見てもらうようにしています。近年、消費者のニーズも変わりつつあり、有機農業に参入する方も増えてきています。取引の価格は上がっていますが、生産者にはあまり還元されていない現状もあり、生産したものにいかに付加価値をつけ、販売するかが今後の農業では重要になると考え、6次産業化を行っています。これからも安心・安全で素材本来の味が楽しめる商品を消費者の方に届けていきます。



代表取締役 東 博巳さん

## 麦、大豆、雑穀 年間スケジュール



## 土づくりについて

できるだけ自然に任せた農業が良いと考え、循環型農業に取り組んでいます。堆肥舎を所有しており、畜産農家からいただいた牛糞、豚糞を半年程度切り返し、発酵させ、完熟たい肥にしたものを使用しています。堆肥には自社製米の糠を入れることで発酵を促進させます。美味しさを追及するためにBLOF理論の考えを取り入れ、排水性と保水性の相反する要素が両立する土づくりを行っています。

## 除草について

除草はジャンボタニシにさせており、田んぼ内の除草作業はほとんどしません。また、長年無農薬で米作りをしてきたため、カブトエビが生息しており、それが動き回ることによって土が濁って雑草の生育を抑制してくれています。取り扱っている作物の品種が多く、有機農業への転換期の田もあることから、混ざらないように使用する機械の掃除はしっかり行っています。

## 水稲 年間スケジュール

作業	水管理	注意事項・ポイント
1~4月		2回に分けてポット苗を準備する。
5月 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>施肥</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>種粃、苗床準備</p> </div> </div>	苗の上で角材を引っ張り、苗を倒して強くする。	
6月 <div style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 5px; width: 100px; margin: 0 auto;">田植え</div>		
7月	深水 深水 深水	落水すると水の溜まっているところへジャンボタニシが集中する為、あえて深水にして行動制限をかけず、被害を分散する。それにより食害を受けても再生可能な状態を保てる。
8月	中干し（1週間程度） 深水 深水	
9月 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>緑米の収穫</p> <p>黒米の収穫</p> </div> <div style="width: 30%; text-align: center;"> <p>深水 深水 落水</p> </div> <div style="width: 30%; text-align: right;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">収穫次第、乾燥調整</div> </div> </div>		
10月 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>うるち米の収穫</p> <p>もち米の収穫</p> </div> <div style="width: 30%;"></div> <div style="width: 30%;"></div> </div>		
11月 <div style="text-align: center;"> <p>赤米の収穫</p> </div>		
12月		



## 生産者コメント

地域の環境保全と食べる人の健康を願い、無肥料・無農薬栽培に取り組んでいます。

自然の法則やリズムを学ぶことで、少しずつ良くなってきている実感があります。自然栽培を学ぶということは、生き方・考え方を学ぶということなのかなと思っています。

食料自給率や高齢化、担い手不足など、今の農業界の抱える問題というのは個人でどうできるものばかりではありません。

それでも地域社会、未来の子供たちによりよいものを残していけるよう環境保全型農業の推進と発展に貢献していきたいと思います。



富田 和孝さん

## 麦、大豆 年間スケジュール

	麦	大豆
4月	中耕	
5月	収穫	
6月	麦は米、大豆に比べ地力の有無が大きく影響する作物。無肥料で栽培する場合は、土づくりがポイントになる。	
7月		耕耘 播種
8月		中耕、土寄せ
9月	中耕機械の関係上、大豆と同じ条間（65cm）で播種している。	草取り（手除草） 機械除草できなかったところは手で取る。
10月		
11月		収穫
12月	耕耘 播種	
1月～3月	麦踏、中耕	

**大豆・麦づくりについて**

麦・大豆は正直種まきから収穫まで特別なことはしておらず、ひたすら草対策に追われています。加工品の原料になっており、経営の安定感の為にも栽培技術の向上を目指していきたいです。

条間65cm、播種量6～7kg

1回目の中耕、土寄せを雑草が生える前に行い、その後1カ月はでえきるだけ多く行う。

条間が広い為、種を多めに撒く。（5～6キロ/10a）

除草剤を使わない為、1回目の中耕を草が生える前に行い、その後も月1回以上の中耕を行う。無肥料の為初期生育が遅い為、小さい麦を土に埋めないよう気を付ける。

## 水稲作りのポイント

### 土づくりについて

秋冬の耕耘をせずに春草を生やし、刈込、乾燥、鋤きこみを行う。  
 生のまま鋤きこんでしまうと腐敗してしまい、虫がつきやすくなるので、刈込んでから一週間は乾燥させた草を鋤きこんでいます。  
 以前は春草が伸びるのを待って5月20日頃まで待っていたが、天気の関係もあり、最近は早めに鋤きこんでいます。

### 除草について

浅水管理でジャンボタニシの活動を抑えることで除草します。  
 それだけだと梅雨の雨で食害が多発しやすいので、補植する労力をタニシを拾うことに割くようにしています。  
 我が家では、ポンポン草を田んぼの周りに置き、集まってきたタニシを拾うことで、以前より省力化につながっています。時間稼ぎにもなる。それでも生えたところは手取り除草します。

## 水稲 年間スケジュール

	作業	水管理	注意事項・ポイント
4月	種籾準備		春草をフレールモアで刈り、枯らして鋤きこむ。
	苗床準備		
5月	春草刈込み	1回目耕耘	35日前後の苗で植え付け。分けつ数不足対策で取り株多めで植え付け。
	播種		
6月	2回目耕耘	田植え	タニシ対策で初期10日は浅水
	草取り	タニシ拾い	
7月	↓	浅水	
		浅水～深水	
8月		深水	
		中干し（1～3日）	
9月		間断かん水	
		落水	
10月		稲刈り	
		乾燥	
11月		もみすり	秋起こし、冬起こしはせず、春草を生やす
		種取り	
12月～3月			

## 生産者コメント

新規就農して13年が経ちました。水稲は無施肥無農薬栽培、水田ゴボウとWCS(飼料米)は耕畜連携の堆肥を使用し、無農薬無化学肥料で育てています。菊池川流域は2000年の米どころであり、先駆的な米農家に教えていただきながら米作りをしています。畜産も盛んであることや、GI認定を受けた水田ゴボウのブランドなど、先人達が築き上げてきた基盤に感謝し、日々励んでいます。現在は有機JAS取得に向けて準備を進めています。

気候変動の影響が多いので、農業を科学的に見て、良い作物を再現できるように学んでいる最中です。農業×他産業のテクノロジーに積極的に取り組み、経験値だけでなく、デジタルな指針も活用しています。

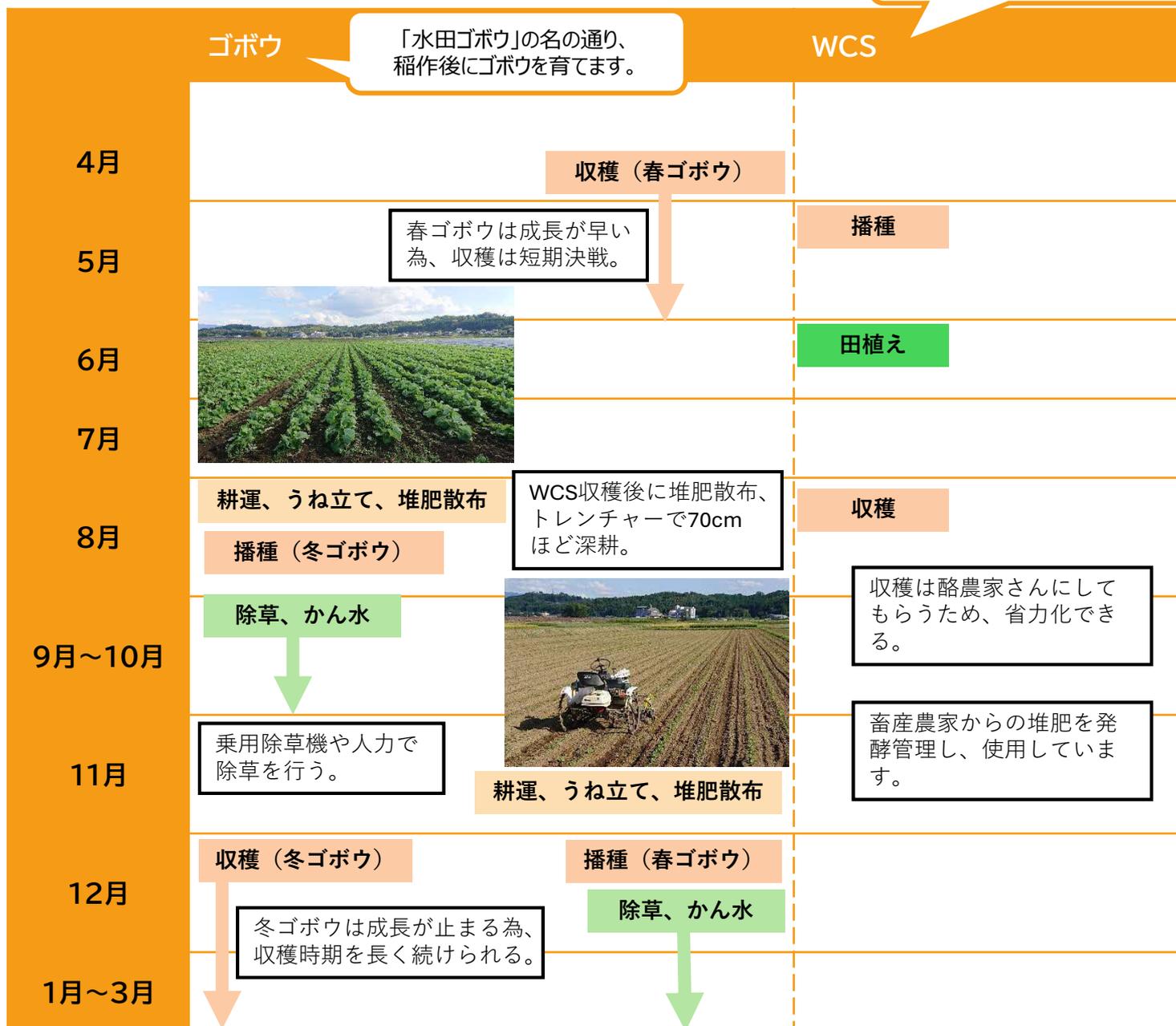
熊本県有機農業研究会の研修生受入農家として認定され、これから研修生受入を始めます。これからの地域農業の担い手になる仲間が増えるよう、共に学び、切磋琢磨していきます。



代表 實取 義洋さん

## ゴボウ、WCS 年間スケジュール

水田ゴボウとWCSの栽培時期がベストマッチ！



## 水稲作りのポイント

### 土づくりについて

稲藁の鋤き込みが主ですが、厳冬期(1月頃)に浅く耕運してジャンボタニシ対策をしています。

### 除草について

田植えと同時に溝切りができるように機械を改造し、水位センサーの活用等で水管理の効率化を図りつつ、ジャンボタニシ対策をしています。溝切りで田んぼの表面積が増え、稲の高温対策に繋がることを期待しています。

### その他の取組について

熊本地震の復興支援プロジェクト「熊本ごはん組」に参加し、江戸時代の熊本在来稲「穂増」を復活させ、当時のように無施肥無農薬で育てています。菊池川流域の稲作文化の世界発信を目指し、花の香酒造(和水町)と連携し流域農家の生産組織も出来ました。穂増が原料の日本酒「産土」は全国各地で取り扱われています。

## 水稲 年間スケジュール



## 生産者コメント

「美味しいお茶は畑から」をモットーに、年中茶畑と向き合いながら日本茶の製造・販売を行っています。8年前に新たな可能性を感じ、一部を有機栽培へ切り替えました。慣行栽培と有機栽培の区別なく、お客様に「安全、安心なお茶」をお届けしたいという思いのもと生産しています。

あまりお茶を飲まないお客様にも届けられるようにお菓子屋さんと自社のお茶を使ったスイーツの共同開発を行っています。どのスイーツもお客さんも自分も納得できるよう1年以上かけて作っています。

販路拡大とPRを兼ねて百貨店などでの試飲販売会への出展も積極的に行っています。

今後は販路拡大が可能であれば、さらに有機栽培の面積を拡大していきたいと考えています。



園主 齊藤 敏春さん

## 茶作りのポイント

### 土づくりについて

- ・有機発酵肥料（ボカシ肥料）：微生物の力で土を柔らかくする
- ・油粕：地力増進（元肥）
- ・石灰：土壌のバランスを整える。

土づくりは最重要課題です。お茶は永年作物で、結果が出にくい部分もあり難しさは感じますが、今後もさらに試行錯誤しながら有機茶の味を追及していきたいです。

### その他のポイント

新芽が出始める3～4月の霜害対策がとても重要で、その年の収量に直結します。その為、3月になると防霜ファンを回し、その上でパトロールを行います。芽が出てくるほど温度に気を配ります。夏場は暑さ対策をしながら手作業でカズラを取り除きます。



## 茶 年間スケジュール

作業		注意事項・ポイント
4月	防霜 工場掃除・点検	防霜対策を行い、最低温度が氷点下にならないよう気を配る。
5月	一番茶摘採、製造 整枝 裾刈	収穫適期は2~3日であり、タイミングを逃さず摘採する。
6月	二番茶摘採、製造 	製造は葉肉の厚さなどで蒸し時間を調整する。
7月	更新（深刈）	更新し、枝のみにすることで茶畑をリセットでき、虫も付きづらくなる。
8月	草刈	かずらを手作業で取り除く。
9月	施肥（苦土石灰、油粕） 中耕	
10月	除草 整枝	
11月	施肥（ポカシ肥料） 敷藁	
12月	施肥（油粕） 農道整備	
1月	草刈 枝打	
2月	施肥（ポカシ肥料、苦土石灰） 中耕	
3月	防霜 機械点検	防霜ファンの設定温度、開始時期、強風期

## 企業概要

山都町を拠点に、農産物の付加価値向上や地域づくり活動の一環として地域資源の利活用を推進することを目的としている。獣害や管理放棄等により荒廃した竹林において竹の皆伐・間伐を行い、竹林整備で出た竹材から農業用の土壌改良材や発酵促進剤、畜産や水産等の飼料、ぬか床などに使える乳酸発酵竹パウダー「山都竹琉：ヤマトタケル」へと加工、販売。竹パウダーとスマート農業技術を利用した有機農業を実施。

## 取組について

- ・産地の土壌特性に応じた土づくり  
収穫後の土壌分析・施肥設計・堆肥散布、竹堆肥による土壌改良
- ・水田から発生するメタンの排出削減を目的とする収穫後の秋耕
- ・省力化に資する先端技術の導入  
ラジコン草刈り機による除草  
ドローンの活用（追肥・センシング）



## 企業概要

当社は、同町の基幹産業である農業分野（畜産業を含む）において、個々の農業経営の強化やスマート農業への取り組み、みどりの食料システム戦略による環境に優しい農業を実践し、ローカルフードを活用した新しいビジネスモデルを創出するための官民連携による地域商社である。

町内の先進的な農業の取組や関係人口の対外的な情報発信を行うとともに、人材育成を実施し、「あさぎり地域づくり協同組合」を通じて、域内の地場産業の担い手として育成された労働者の派遣を担う。

## 取組について

農村地域脱炭素モデル事業への取り組みを開始。地場産業の木炭製造業と連携し、筍生産の竹林や林業由来の原料を組み合わせるバイオ炭を製造し、CO2貯留によるJクレジット化による収益の多様化を図る。また、製造したバイオ炭入り牛糞堆肥を製造し、有機農業を推進する。

今年度は可搬式の簡易炭化器を購入し、地域おこし協力隊やタケノコ生産業者と連携し、伐採竹を主として炭づくりに着手する。バイオ炭入り堆肥を製造し、南陵高校や県農業試験場などの協力を得ながら圃場への散布を行い、地元生産者協力のもと、効果の検証を行う。

町独自で進めている環境学習と連携し、脱炭素人材の育成と地場産業の担い手確保を図る。



## 地域概要

農業経営体数：839経営体（農林業センサス2020より）  
 有機水稲面積：48ha（令和7年2月時点）  
 有機野菜面積：3.9ha（令和7年2月時点）

耕地面積：3,320ヘクタール（農林業センサス2020より）  
 有機稲作農家数：20経営体（令和7年2月時点）  
 有機野菜農家数：10経営体（令和7年2月時点）

## 背景・課題

千葉県南東部に位置し、温暖な気候と夷隅川流域の豊かな粘土質の土壌によって昔から米作りに適した土地である。自然との共生や生物多様性のまちづくりを進めているいすみ市は、2012年頃からまちぐるみで有機稲作にゼロから取り組み、4年で全国初の地元産有機米100%のオーガニック給食を実現。有機米のブランド化、就農希望者の移住増加、地域活性化へとつながった。米価の下落や、農家の高齢化による離農者の増加、それに伴う耕作放棄地、害獣の増加などが課題。

## めざす姿

「田んぼの大小」や「経営規模の大小」に関わらず、あらゆる農家が有機稲作に取り組めるようにしたい。

## 取組内容

- 有機農産物の学校給食導入
  - ・学校給食での地元産有機米100%提供
  - ・学校給食有機野菜供給体制構築事業による地元有機野菜の学校給食への導入
- 有機稲作関連支援策
  - ・補助金による経営リスクの回避
  - ・機械の無償貸し出し（ポット成苗システム、乗用除草機、温湯種子処理機）
  - ・市職員、普及指導員による現場サポート
  - ・研修の受講
- 有機稲作研修支援制度
  - ・先進農家のもとで3年間研修し、いすみ市で将来的に有機米づくりのプロとして自立を志す方を地域おこし協力隊として採用
- 市独自の認証制度「いすみそだち」
- 水田均平化の実証、水管理システムの導入
  - ・雑草対策の有効化、除草効率の向上
- 小学校での独自授業「いすみ教育ファーム」の実施
  - ・モデル校での総合的な学習の時間に実施
  - ・農家の方々と一緒に田植えから稲刈り、脱穀、そのお米をかまどで炊いて食べるまで体験



写真：いすみそだちHPより



写真：いすみっこHPより



写真：いすみ市HPより

## 地域概要

耕地面積：6,140ヘクタール（農林業センサス2020）  
農業経営体数：2,022経営体（農林業センサス2020）

有機農業取組面積：83.5ha（農林業センサス2020）  
有機農業取組経営体数：79経営体（農林業センサス2020）

## 背景・課題

石岡市は茨城県の中央に位置しており、気候は温暖で、水稲、野菜、果樹など幅広い品目の生産が行われている。有機農業は1970年代から行われており、1997年には有機農業に既に取り組んでいた地元生産者と県外からの移住者により、「JAやさとお機栽培部会」が創設され、石岡市の有機農業の拡大に寄与している。

農業を取り巻く課題としては、高齢化、担い手不足を要因とした遊休農地の増加等があり、新規就農者の支援や、遊休農地を耕作圃場にする農業者への補助金交付等の対策を講じている。

## めざす姿

現状の有機農業の更なる拡大の推進、農業における担い手不足の改善、有機農業産地としての知名度アップを実現する。

## 取組内容

## ■ 市内保育所・認定子ども園、小学校及び特別支援学校への有機野菜配布

- ・有機農産物に地域の子どもたちが直接接触する機会を設け、家族で新鮮な野菜を味わってもらいながら、食育の重要性を周知PRするため、石岡市産の有機野菜を配布した

## ■ 学校給食での有機農産物の提供

- ・年間を通し、市内全小中学校及び特別支援学校で、一部の献立に有機農産物を使用
- ・栄養教諭の校内放送等を用いた説明や、生産者が児童に対して有機農作物について直接説明する機会を設け、食育の充実を図った

## ■ 新規有機農業者支援

- ・新規有機農業者の有機JAS規格資材の購入支援

## ■ 新規就農者支援施設「朝日里山ファーム」の運営

- ・就農相談から独立就農までの工程を支援



朝日里山ファームの卒業生

写真：石岡市提供

## 地域概要

農業経営体数：318経営体（農林業センサス2020）  
 耕地面積：684ヘクタール（農林業センサス2020）

有機農業経営体数：11人（R3年度時点）  
 有機農業作付面積：59ヘクタール（R3年度時点）

## 背景・課題

宮崎県のほぼ中央部に位置し、農業を基幹産業とする緑豊かな町である。町の北西部には、1982年（昭和57年）に九州中央山地国定公園に指定された国内最大規模の照葉樹の自然林が広がり、2012年（平成24年）に「綾ユネスコエコパーク」に登録された。

綾町の農業振興においては、綾町憲章「自然生態系を生かし育てる町にしよう。」に基づき、消費者の健康と文化的な生活の確保、さらに健全な土づくりにより農業の振興を図ることを目的に「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、自然生態系農業の基準と認証方法など、綾町が責任を持って健康なほんものの野菜を提供していくシステムを確立した。

一方、課題としては生産者の担い手不足、有機農業の生産技術の継承などがある。

## めざす姿

綾町の「『ほんもの』を求め、『ほんもの』をつくる町づくり」のさまざまな施策が「選ばれる産地」として綾ブランドを高める。

## 取組内容

- 平成13年より有機JAS認証登録機関へ
  - ・有機JAS認証にかかる農家負担の軽減
- 自然生態系農業の認証制度
  - ・町独自の認証制度
- 綾オーガニックスクール
  - ・2年間の研修で綾町の自然生態系農業の理念や取組、農業経営、土づくり、野菜栽培、農業機械の操作などを学び綾町での就農を目指す
- 食育に関する取組
  - ・「綾手づくりほんものセンター」を通じた地産地消による学校給食への食材提供
  - ・綾町オーガニック給食の推進に関する条例の制定
  - ・小中学生対象給食レシピコンテストの開催
- 有機野菜の6次産業化
  - ・食品加工業者との連携強化による新商品開発
- 綾手づくりほんものセンター
  - ・客層の90%は町外からの消費者であり、健康でおいしい綾ブランドの発信拠点となっている
- 資源循環を行う体制整備
  - ・堆肥コンクールの実施
  - ・時給肥料供給施設、家畜糞尿処理施設、生活雑廃コンポスト製造施設の設置



綾手づくりほんものセンター  
 写真：綾町自然生態系農業推進会議HP

